『光輪』より抜粋

法龍は死後の一大事よりは今の一息が一大事であったのだ

（讃題）大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば至徳の風静に衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に至りて、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵うなり（行巻）

この御讃題の意味は人世は果てしのない生死の苦海でありますが、弥陀の名号を聞信し、摂取不捨の利益を蒙り、本願や行者・行者や本願の身となれば、この人世のままが光明の広海と変り、無明の闇が晴れさえすれば、現益として至徳具足の益、転悪成善の益を獲、当益としては報土往生を得て弥陀同体の証を得る。この現当の両益を蒙れば普賢の徳に遵うなりと言う還相廻向の利益を獲ると言う意味であります。

皆様は疑いが晴れて満足が出来ましたか。凡夫が晴れられるか、凡夫にこれで満足と言うことが有らるるかと仰せらるるかも知れませんが　晴らす力が光明無量にあり、満足さす力が寿命無量にあるのであります。鸞師は「論註」に名号を如実に聞信すれば「衆生一切の無明の闇を破し、衆生一切の志願を満足せしめたまふ」と仰せられ、祖師はこの意味を和讃に

無碍光如来の名号と　かの光明智相とは
無明長夜の闇を破し　衆生の志願をみてたまふ

と仰せられてありますが、同行方は晴れて満足が出来ましたか、出来ないのは観念の遊戯をしているだけであって、実地の体験が無いからであります。他力不思議の名号を三十年聞かされても、五十年聞かされても、晴れたも判らず暮たも判らないのは何処に欠点があるか御承知ですか。今西本願寺切っての問題の布教師大沼法龍が生命に懸けて真仮の水際、信前信後の角目を判然り鮮かに説かして戴きますから全国から参集された選り抜きの同行方は、腹を据えてお聞きなさいよ。

貴方方は三毒の煩悩は往生の邪魔にならない。この機に用事はない。助かっている事を聞けと平気で澄ましておいでになるが、その煩悩の中に第十八願から洩れた代物がいくつも隠れている事を御承知ないのでしょう。挙げて見せましょうか。

第一に五逆、この大衆の中に親を殺さない人が一人でもおりますか。手を掛けてこそ殺さなくても、心の中で毎日毎時殺しどおしに殺しているではありませんか。

第二に謗法、同行は高座の下から、下手じゃ、上手じゃ、長いじゃ、短いじゃと小言言っているのは謗法であり、僧侶は高座の上から、あれは異安心これは間違いと自分の程度の低い事は判らないで批判しているのが、謗法の親玉なのだ。

第三に闡提、これは無信と訳す。地獄と聞いても驚かず、極楽と聞いても慶ばず、まだ死なないと平気でいる心、宗教を受けつけない心が闡提なのだ。

第四に邪見、自分は信前の入口にいる事も知らずに、信後の鮮やかな境地、「善も欲からず悪も恐れなし」など聞かされた時、凡夫にそんな判然した事が有らるると攻撃しているのが邪見であって、これは法の不思議さが判らないのだ。

第五に憍慢、私は素直に聞かして戴いて一度も疑うた事はないと自惚れているが、三千世界を探したって素直な人間がおるものかい。法座に出た時だけ猫を冠っているのだから、素直な者と自惚れているのは機の深信が抜けているのだ。

第六は弊、弊とは修繕がきかないのだ。信前信後の水際を分けて聞かしても「あんな難しい事は判らないから、昔のなりの死にさえすればお助けで負けて置いて貰おうや」と包む稽古をしている人が弊で修繕がきかないのだ。

第七が懈怠、今日聞けなければ明日、この度の御縁で解決がつかなければ、次の御縁と長綱を張るのが懈怠ではないか。

同行よ!!　第十八願から　唯除五逆誹謗正法とこの二機は除かれてあるぞ。

すると直に「謗法闡提廻心皆往」と善導様は仰せられて有ると言うかも知れないが、言われてあるよ、有ればよいではないか、それは御教化の御言葉よ。御言葉が書かれてあるのは書かれた方のお心よ。廻心したか。逆謗のいる事さえも知らずに、素直に聞いていると自惚れている人間に廻心が有るか。廻心のない人間に懺悔が有

るか。懺悔のない人間に機の深信が有るか。機の深信のない人間に法の深信が有らるるか。「涅槃経」から五逆・謗法・闡提は難化の三機、難治の三病は教化が出来ない、療治が出来ないと捨ててあるのだ。「正信偈」から「邪見憍慢の悪衆生は信楽受持すること甚だ以て難し、難中の難これに過ぎたるはなし」と捨ててあるのだ。「大経」下巻の東方の偈に「憍慢と弊と懈怠とはこの法を信ずること難し」と三機は除かれてあるのだ。一つ有っても助からないのに、七つ道具を具備して置きながら、この機に用事はない、死にさえすれば華降る浄土とは何を寝呆けているのだ。

何を生意気な事を言う　南無は機の方、阿弥陀仏は法の方、機法一体に成就してあるのに、今さらこの機を見る必要が有るか、と言わるるかも知れないが、成就して有るのなら遠慮なく御覧なさいよ。いくら法体には成就してあっても、機受の信相が抜けておるなら自分のものにはならないではないか。いくら法体成就の機法一体は十劫の昔に完成されてあっても、今現在に信念冥合の機法一体の領受が出来なかったなら、観念の遊戯に過ぎないではないか。いくら十劫の昔に正覚を成就さ

れても、信楽開発しなかったら自分とは無関係ではないか。親が大丈夫でも、子が大丈夫に成れなかったら「行者正受金剛心」とか、「この心深信せることなほし金剛の若し」と仰せられた御言葉が嘘に成るではないか。それでも本派では　機を突いて教える者は異安心だと批難しているが、自分の機さえも突いて教え切らない者は　実地の体験の無い無安心の親玉だ。機を突く奴は間違いだと攻撃しているが、逆謗の屍が自分であることさえも気が付かず、素直な者と自惚れているのは気狂いだぞ。

同行よ!!　真宗の大部分の布教師が、自分は第十八願を体得したと得意がって布教しているが、法龍の眼から見れば第二十願の入口にいて、第十八願の真似ばかりしている幼稚な危険な布教を平気でやっているのだ。あれで真宗が発展すると思っていたら大間違いだ。いくら声や節や抑揚で錦を着せていても、いくら泣かしても笑わしても　美辞麗句を並べても、身振りや学階で威して見ても、つづまるところは「わが機に用事は無いぞ、素直に名号に向いておれ、死にさえすれば弥陀同体」

に持って行くより他に道がないのだ。何と情けない布教かい。欠点を挙げて見せましょうか。

第一の欠点は「わが機に用事はない。この機を見ていては千年経っても夜は明けない」と言っているが、わが真実の機に用事が無ければこの忙しい世の中に説教聞きなさんな。この真実の機を生かそうための五兆の願行ではなかったか。この自力計度の計らいの機に留まっていては千年経っても夜は明けないのだ。この実機が名号法に満足ささるるまで　なぜ進まないのだ。本願や行者・行者や本願が第十八願の境地ではないか。法を見てよし機を見てよしが仏凡一体、機法一体の妙味ではないか。それを見ては手間が掛ると包む稽古をしているのは自力の臭みが残っているからではないか。だから第一の欠点と言っているのだ。

第二の欠点は誰も彼もが、「素直に聞け　く　」と言っているが、素直に聞けと言わなくても、お説教を聞きに来ている者に喧嘩しようと思って来ている者は一人もいないのだ。皆素直に聞いているのだ、感情の猿だけは。素直に聞き得る人間

なら善人だ。善人なら悪人正機の的が外れているから　第十八願の対機にはならないのだ。三世の諸仏が呆れて逃げている機態を抱えておりながら、素直に聞けとはチャンチャラ可笑しいではないか。なぜ素直に機態を見よと教えないのだ。素直な人間と自惚れているから第二の欠点だ。

第三の欠点は「名号に眼をつけよ」と教えているのが欠点なのだ。名号に眼をつけるのが欠点か。いかにも欠点だ。それを第二十願の機類と言っているのだ。「名号には万善万行恒沙の功徳が籠っているから、名号に眼をつけよ」とは棚の上にお前の為の牡丹餅ができているから喜べよと、眼を付けただけで何が有難いのだ。何時食べさしてくれるのだ。死にさえすればー。こんな馬鹿らしいことが有らるるか。此の世ではどうも成れないのだ、死にさえすればと　向うに眼をつけて喜べ、と。これで生きた宗教と言えるか。だから第三の欠点と言っているのだ。

第四の欠点は死にさえすれば弥陀同体、結果を言えばそうなのだ。しかし如何した人が死にさえすれば弥陀同体なのだ。それは信楽開発された人の事であろう。

それに信前信後の角目も教えず　（説教師）「鶴の脚の長きを短こうせよと言うにも非ず、亀の脚の短きを長うせよと言うにも非ず　胡椒の辛いは辛い儘、砂糖の甘いは甘い儘　悪い心を直せでないぞ、曲った根性を正せでないぞ。やりたい放題やりつらせ。飲みたい放題飲み歩け。あとを受持つ親じゃぞよ」と言うような撫付け説教ばかりして、現在を抜きにして死後を夢見て、平生業成がお留守に成っているから第四の欠点と言っているのだ。

これは私が勝手に言っているのではない、お聖教の定規に当てて見せましょうか。祖師聖人は「化土巻」に第二十願の信相を顕わして「信罪福の心を以て本願力を願求す、教は頓にして根は漸機なり、行は専にして心は雑はる」、「信罪福の心」とは罪は恐ろしいから出て来るなよ、福は有難いから出て来いよと言う気持ちで、本願力を願求するとは名号を仰いでいるのだ。名号を向うに眺めているのだから　名号は他力不思議で頓極頓速に五十二段を超証す妙法であるけれども、受ける機態が愚図愚図している漸機だから、何年経っても解決の境地まで進み切らないのだ。「行

は専にして」とは諸善万行を離れて名号一行を専修しているけれども、五専各修の程度だから心は雑修の境地を離れ切らないのだ。だから「信罪福の心を以て」とは「信罪」は、罪は恐ろしいと信ずるので、わが機を見れば手間が掛ると恐れ、この機に用事がないと逃げるので、臭い物に蓋をする程度だから自力の機執は除かれていないのだ。法を見てよし機を見てよしの第十八願の境地まで進んではいないのだ。「信福」とは有難い心に眼をつけているので、「素直に聞け素直に聞け」と言っているのは　善人を粧うているので悪人正機の的が外れているのだ。己の実機を抜きにして、名号法の尊さに眼をつけて有難がっているので、教は頓であっても根は漸機なのだ。だから、感謝の心が湧き上がり喜ぶ時は　往生は一定の思いをなし、実機の牛が角を出す時は　往生は不定の思いをなす、若存若亡の境地を離れ切らないから、「死にさえすれば弥陀同体」と現生不退を抜きにして死後の往生を夢見ているのだ。だからこの四つの欠点が祖師の「化土巻」の第二十願の境地に符合しているのではないか。だから第十八願の説教に成っていない。危険極まる第二十願の自惚

同行を増長さすに止まる布教と言っているのだ。

いわゆる他力の中の自力の境地で「口伝鈔」のいわゆる善慧房の味方の体失往生身命終を宣説するのであって、平生業成に成っていないのだ。鮮やかな信楽開発の境地に立っていないから、「死んだら往生、死んだら華降る浄土」と死後の往生を夢見ており、この世の解決がないから「何時とはなし」と言うより他に教える方法がないのだ。どうもはっきりしないから、「今度聞いたら　〈　」と　力む姿が、調熟の光明のお育てを蒙り、果遂の誓の軌道に乗って第十八願に向って前進しているのだ。他力を向うに眺め、機を包んで無我を粧うているけれども、信前信後の水際も立たなければ、真仮の分際もはっきりせず、晴れない前と晴れた後との角目も判るはずがなく、ただ「素直に　〈　」と波風の立たないようにお化粧して、まるで腫物に触るような信仰であり、ちょうど去勢され、ふ抜けの形に成ったのを無我の同行のように心得ているが何と情けない退嬰的な信仰だろう!!

戴いた信が誠なら、み親の念力が届いたら、不思議の仏智が貰えたら、任せたら、

苦が抜けたら、死んだらと、「なら」とか、「たら」とか、「だら」とか言うのは希望であり、期待であり、希願であり、希念であって、共に未来の事であって、現在の事ではなく、仮定であって現実でないのだから、慶べるはずがないではないか。「百万円貰ったら」が嬉しいか。

面白い例を挙げて見せようか。或処に仲のよい夫婦がいて、家内が「鯛は塩焼が一番よい」、主人が「刺身が一番おいしいのだ」、「いや塩焼」、「いや刺身」と二人が争うている時、隣の老人が通り掛って、「何を争うているのだ」。「お爺さん聞いてお呉れよ、鯛は塩焼が一番よいね、ほうれん草のおひたしに銀飯なら、いくらでも食べられるね」、「うんそれは上等」、「お爺さんよ、一杯飲める癖に何を言っているのかい、刺身にわさびで甘露醤油で、鼻をつんと突いた時、一級酒をきゅっとやって見なさい、胸のぐうぐう焼けて行く時は何とも言えないよ」爺さん口なめずりをしながら、「それは日本一」、「爺さんどちらがよいかね」、「どちらもよい」「それでは旗は上がらないではないか」、「それなら半ぺらは塩焼にせよ、

半ぺらは刺身にせよ、中の骨は吸物にせよ」、「それなら二人が喧嘩をせんでもよいね」、「よい事を教えてやったから半分呉れよ」、「上げるだんではないよ」、「それなら今出せ、料理してやろう」「今はないよ」、「何時の事かい」、「貰うたら!!」

「貰うたら」で同行喜べるか!! 鏡に近寄れば姿が見える。法に接近すれば機の醜さが見えるのだ。或る人達は機を突く者は異安心のように言っているが、無い物を有ると言えば間違いでもあろう。有る物を有ると知れ、今現に逆謗闡提の機が動いているではないか。それが五兆の願行の的ではないか。その機が開発されなくて誰が助かるのだ。三世の諸仏が呆れて逃げた実機の牛を、これに用事はないと包んで置いて 名号を高嶺の月と仰ぎ、往生を死後の華と眺めて観念の猿を踊らして、この身この儘この機のなりで、三悪道に走り込もうとしているのが正当の安心か。

お経やお聖教に説かれた難化の三機、難治の三病の実機を照し出されて、身命を賭して求道し、難中の難を突破さされて、法を見てよし機を見てよし、握る世話もいらないが離す世話もいらない、あら心得易の安心に大満足さされた境地が有ると

教えるのが異安心か。

法龍は死後の一大事よりは今の一息が一大事であったのだ。今晴れて満足の出来ない者が死後の五十二段が望めるか。手前の川の渡れない者が死んだ先が渡れるか。死にさえすれば五十二段とは嘘ではないが、本当ではないぞ。何故嘘でないか、死ななければ五十二段は超証出来ないのだから嘘ではないのだ。何故本当ではないのか、信楽開発さされた者が五十二段ではないか。どうも成れない者が死にさえすれば五十二段とは、原因を抜きにして結果を夢見ているから本当でないと言っているのだ。こんな聞き方をしているのを寝呆ていると言っているのだ。こんな受取り方をしているのを気狂いと言っているのだ。

同行よ、腹を据えて聞けよ。弥陀の名号は光明無量と寿命無量。光明無量の智慧が　第十八願に作用けば、唯除五逆誹謗正法と　真実の機が照し出さるるのだ。寿命無量の慈悲が第十八願に作用けば、若不生者不取正覚と真実の法が腕前を顕すのだ。実機が照し出さるるから信機となり、懺悔となり俗諦の行儀となるのだ。こ

の機が摂取せるるから、信法となり、歓喜となり、真諦門となるのだ。

調熟の光明のお育てを蒙り　素直に聞いていると言う自惚が照し出されて、自分が極悪最下の機であったことに驚き、極善最上の法に摂取された姿が至心信楽己忘れた境地であり、これを即得往生住不退転とも平生業成とも言い、これを信楽開発とも心得開明とも現生不退とも「信受本願前念命終、即得往生後念即生」とも名づけ、「御伝鈔」には「たちどころに他力摂生の旨趣を受得し」、「御文章」には「三世の業障一時につみきえて」と説かれ、「この一念をもてば娑婆のおわり臨終と思え」とか、「これを知らざるをもつて他門としこれを知れるをもつて真宗のしるしとする」とか仰せられ、祖師の御己証の不体失往生、心命終となるのだ。この唯信独達の法門こそ浄土真宗の真宗たる真価を発揮するのであって、この境地に生かされた時、信前信後の水際も立ち、真仮の分際も鮮やかに体得出来るのだ。

私も始めから機を突く布教ではなかった。大学を卒業して研究科に入学さして戴き、明年卒業と言う時まで御聖教に眼を晒し、御説教を聞かして戴く時は有難涙に

咽んだものであります。暑中休暇で岩国に帰った時、上岡みよと言う女同行に突かれ、京都の嵐山で論文を書いている最中に布哇の母より、

「明年三月は卒業ですが、学校の卒業は出来ても信仰の卒業が出来なかったなら、同行の心を満足さすことは出来ませんよ。若しも自分に開発が無くて説教すれば、追剥よりもまだ悪いですよ。本当に開発しましたか。実地に苦が抜けましたか。大満足が出来なければ、無漏田開教師が帰国されて京都におらるるから、訪ねて、お聞き下さい」との手紙を受取ってから腹底に動かぬ心の蟠っている事に驚き、種々教えを蒙り、道理理屈は判っても、判らぬ心が判然り判り、真剣に成ればなるほど、反対の心が照し出されたのだ。これを導く知識はおらぬか、これを開発さす大徳はおらぬかと、いくたび総会所に歩みを運んでも、「本願力の不思議さを素直に聞け。戴いた信が誠なら死にさえすれば華降る浄土」より他には教え切らないのだ。知識にはこんな心は無いのか。同行にはこんな思いはないのか。有るのに気が付かないとすれば大事だ。この心を誤魔化して死後を夢見ているのなら大変だ。

こんな底抜けの悪性が隠れているのに　仏智の不思議がこれに届かなかったなら救われないではないか。このきょろっとした心は何時救われるのだ。卒業なんどは五年七年遅れたって、この迷いの夢が覚めなかったら、無量永劫の問題ではないか。法のお手元は十劫の昔に正覚を取っておられても、今の苦悩を今晴らして戴かねば、私の解決にならないではないか。もしこの解決がついたなら、日本国中の僧侶から「機を突く奴は異安心だ」と総攻撃を受けようとも、世界中の人類から「機を語る者は間違い者だ」と批難されようとも、逆謗闡提の劣機がいるのが証拠ではないか。これが開発されなくて仏智の不思議と言えるか。この底抜けの悪性が信楽開発されなくて生きた大法と言えるものかい。石に噛り付いても、たとい悶死しようとも、突破せずにおれるかい。

道綽禅師は「後から剣を抜いて追掛けているぞ、とは無常観を教え、前を見れば渦巻く怒涛、着物を脱がずに飛込めば巻付いて溺れるとは、罪悪観、この無常観と罪悪観に攻められた時でなければ信仰は徹底しない」と教えられた。

善導大師は「群賊悪獣に追い立てられ忽ちに見る大河ありとは、自分の悪性に気が付き、右を見れば渦巻く怒涛の青鬼、左を見れば燃え立つ焔の赤鬼、それが法龍の今の心ではないか。やめるにもやめられず、進むにも進まれず、頭の方は急いでも腹の底はまだ死なないと平気でいる。この境地こそ三定死」と教えられたのだ、よーし切抜けずにはいられないぞ。

祖師聖人も二十ヶ年の修行を棒に振り百夜の祈願のその最後、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と切り堕とされ、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、親鸞一人がためなりけり」と躍り上がられたのだ。聞いても知っても自分の計らいは皆駄目なのだ。学問も理屈も往生の助太刀には総てが間に合わないのだ。八方塞りの此の境地、三千世界の者は皆助かっても法龍一人は絶対に助からないのだ。

机の上には小さいお仏壇と右にはお聖教、左には両親の写真、「お母さん!! 私を僧侶にしようと布哇まで行って下さったが、御期待に添う事が出来ず、今猛火に

包まれ、渦巻く怒涛に呑まれつつあるのでございます。私を僧侶にして下さりさえしなければ、こんな苦悩は有るまいものを」と恨む心が五逆の親玉であり、自分の機執のとれないのを棚に上げて、こんな難しい法が何処に有るだろう、「他力」も「唯」も皆嘘だ!!　私一人は八千遍の御苦労に洩れてるのだ、とは謗法の親玉なのだ。これだけ火の付くように苦しくても、心の底は何ともない、無間のどん底から噴き上げる毒焔はお聖教の盃の水ぐらいでは消えないのだ、と平気でいる奴が闡提の親玉なのだ。

　これが難化の三機かい、これが難治の三病かいと、狂っている時、「涅槃経」の無常の虎の絵を思い出した。無常の虎に追い立てられた旅人が　断崖絶壁まで追いつめられ　松の木から命の綱の葛藤にぶら下がり、下を見れば三毒の煩悩の龍は噛み付こうとしている。白と黒の昼夜の鼠は、葛藤の根本をかじりつつあるのに、欲の荷物を負うた旅人は、この世の欲望の蜂蜜の落ちて来るのを嘗めて喜んでいるではないか。今切れたらどうなるのだと、周章てれば周章てるほど振りは大きくなる

ばかりだ。嗚呼どうしよう、どう成ったらよいのだ、どうしたら助かるのだ。聞いたも　知ったも覚えたも、智慧も才覚も学問も、有難いも嬉しいも慎みも、信じたも　戴いたも　得心したも　思い振りだから皆間に合わないのだ。業に引かれて元の古巣に唸り込むより他に道がないのだと　往生の望みが絶えた時、言葉離れて黒煙の中に投げ込まれた時が先か、十劫このかた立ち続けた親が　其機見抜いて成就した誓願不思議で救うぞと、声なき声に動かされた時が先か。躍り上がったぞ、飛び上がったぞ。五劫思惟の本願は法龍一人の為であった。十方法界我物なり、私が参らで誰が参るか。

祖師聖人様　あなた様は七百年の古にこの威大な境地を諦得されたのでございますか。それならばこそ肉食妻帯をした悪魔の坊主よと批難されながらも、師匠に背いた横着坊主よと攻撃されながらも、身は流罪に逢いながら、弁円の剣の下を潜り抜けながらも、「これなお師教の恩致なり」と微笑つつ、死に行く人々の批評位で後すざりが出来るかい、死なぬ仏に逢うたが仕合せではないかとは、何と偉大な信

念でございましょう。七百年の末に生れた法龍も、八方攻撃を蒙りながらも、唯々仏恩の深重なることを念じつつこの信念を叫ばずにはおられないのです。

浄土真宗の現代の布教を眺めた時、体失往生、身命終の死後の往生のみを語る善慧房の味方となり、祖師聖人の平生業成の鮮やかさの、不体失往生、心命終の唯信独達の法門は、猛煙に包まれて、今や真意を消失しようとしているではないか。他力他力と言いながら無力となってはいないか。その儘その儘と語りながらわがままに成ってはいないか。唯じゃ唯じゃと教えつつ　唯に成る事を忘れてはいないか。不思議不思議と説きつつふ抜けに成ってはいないか。

今や　浄土真宗は衰滅の一路を辿りつつあることに気が付かないのか。法龍は浄土真宗を批難する者でもなければ　本願寺の宗政を攻撃するものでもない。唯愛山護法の念に燃え、厳護法城の実を挙げようと身命を賭している者である。政策や技巧や社会事業の真似では赤字の補填は出来ないのだ。唯御聖教の殻を脱して生きた信仰のみに宗教を復興せしむる力が有るのだ。

今や青年男女が浄土真宗から離脱しつつある事に気が付かないのか。その原因が何処に在るか御承知か。第一には僧侶に在るのだ。徒に葬式読経に追い廻され、たまたま布教をすれば　現実の生活とかけ離れ、遠い死後の夢物語を、さも見て来たように浪花節で唸り上げ、一流の布教師と自惚れて、法衣を脱げば酒池肉林、俗人も顔をそむける脱線振りで、姿に掛けての説法は微塵もないではないか。それで青年男女が随喜讃仰すると思っているのか。

第二にはいわゆる同行方が、悪人正機を傘に着て、直して来いとは仰有らないと、放逸無慚の生活をしているために、何年聞いても効能の顕れない宗教なら聞く必要がないと、青年男女が離反しているのだぞ。

今や極悪最下の法龍は　世界無比の宗教たる真俗二諦、現当二世の幸福を得る此の深法に生かされた嬉しさには、毀誉褒貶を外にして、たとい身は八つ裂きにされようとも、十方世界の群類に、この大法を宣布せずにはいられないのであります。鈍根無智の法龍が、十方法界に比類なき絶対他力、唯信独達の妙法に生かされた尊

さには、たとい身は極微に砕かれようとも、学階、度牒は剥奪されようとも、苦悩を抱ける同行の心弦にこの深法を叫び届けずにはいられないのであります。

平成三十年十一月　第一冊発行
令和　元　年十一月　第二冊発行
発行所　親鸞聖人と
大沼和上に学ぶ会
〒933-0007　高岡市角字板鳥五四三-二